

青木紀学長退任記念 最終講義

名寄市立大学青木紀学長退職記念講演

主催：青木紀学長退職記念講演実行委員会

名寄市立大学社会福祉学科

「研究紀要」第5号 抜刷

【2016年4月】

青木紀学長退任記念 最終講義

名寄市立大学青木紀学長退職記念講演



日時：2016年3月15日 18:00～

主催：青木紀学長退職記念講演実行委員会

青木紀学長退職記念講演

略歴

- 1948年 愛知県（豊明市）の農家に生まれる
1966年 愛知県立刈谷高等学校卒業
1970年 静岡大学農学部卒業
1978年 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻（農業史講座）博士課程退学
1979年 東北大学農業研究所教務職員・助手
1987年 博士号取得（京都大学）
論文タイトル「日本における兼業農家問題の歴史的形成と展開」
1989年 北海道大学教育学部助教授
1998年 北海道大学教育学部教授
2007年 北海道大学教育学研究科長・教育学部長
2010年 名寄市立大学学長、現在に至る

2007年～2016年 北海道子ども未来作り審議会会長

2008年～2011年 雑誌『貧困研究』編集委員長

研究業績（一部）

- 1973年 「農村における過剰人口の存在形態」『農林業問題研究』9巻1号
1978年 「わが国における離農対策の展開と問題点」『農業経済研究』50巻3号
1988年 『日本経済と兼業農家』農林統計協会
1989年 「近代の農業・農村の展開」（秋田県比内町史編纂委員会編『比内町史』）
1992年 「感化教育事業実践と新農村建設」『北大教育学部紀要』58号
1993年 「身体障害者の生活基盤と福祉ニード」『北大教育学部附属産業教育計画研究施設研究報告書』
1997年 「貧困の世代的再生産」（庄司洋子他編『貧困・不平等と社会福祉』有斐閣）
1998年 「個人主義とソーシャルワーク」『教育福祉研究』4号
2002年 「生存権はなぜ保障されねばならないか」『公的扶助研究』187-2
2003年 『現代日本の「見えない」貧困』明石書店（編著）
2005年 「Invisible Poverty in Japan」『Journal of Poverty』Vol. 11-3
2007年 『「家族と貧困」研究の動向』『家族研究年報』32号
2007年 「インターロックされ、リンクしている社会福祉の対象」『社会福祉学』48巻2号
2007年 『現代の貧困と不平等』明石書店（編著）
2007年 「Perceptions of Poverty in Japan」『Journal of Poverty』vol.11-3
2010年 『現代日本の貧困観』明石書店

2013年 「日本の子どもの貧困と世代的再生産」（日本教育行政学会編『教育機会格差と教育行政』
福村出版）

2014年 「ピヤシリの麓から」『地域と住民』第9号

退職記念講演

演題 「研究から実践へ、実践から研究へ」

一部 記念講演 （会場：名寄市立大学 121 教室）

18:00 開会あいさつ（小野寺理佳実行委員長）

18:10 青木紀学長講演

19:20 花束贈呈

19:25 閉会あいさつ（寺山和幸副学長）

二部 懇親会 （会場：学食「きらきら」）

19:45～

懇親会会場（本館1階 学生食堂「きらきら」）

※編集の都合上、一部修正をしております。
（編集委員会）

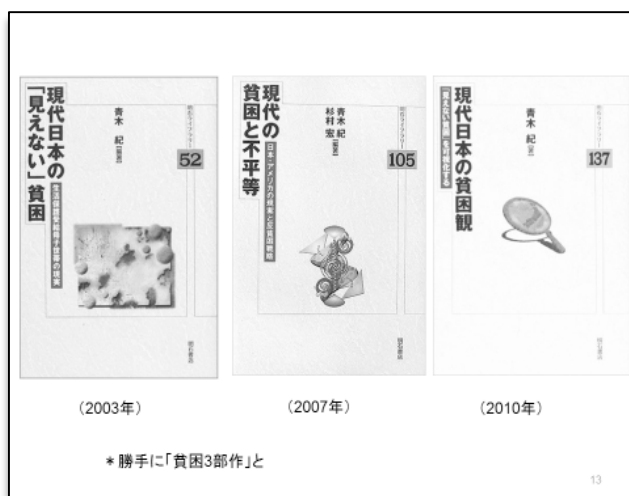
退職記念講演会によせて

雪が深い名寄でも春の近づきを感じる 3 月 15 日、青木先生の最終講義となる退職記念講演会が行われた。青木先生の名寄市立大学でのご在任は 6 年となる。最終講義をむかえられるということは、大学人・研究者としての生活に節目をつけることになる。もちろんご研究は続けられるとしても、この節目の時に研究者にとりて、どういふご心境で話されるのか、その心中はいかなるものなのか、と思つた方も多いのではないだろうか。私もその一人だつた。そうしたことからか当日、教職員、学生はもちろんのこと、名寄市の職員、市民、北大の関係者など、青木先生のご講演を聞きに多くの方が集まられた。

ご講演は「研究から実践へ、実践から研究へ」というテーマでお話された。ご自身の子ども時代、学生時代の生活、研究の軌跡を振り返るお話だつた。子どものときやお若いときの写真も映し出され、研究者として志した学生時代から今日までの長い時間を感じるものであつた。研究への道に進むことへの葛藤、進んでからの紆余曲折と、その時々のご自身の思いを話された。ご研究は、農業経済学をはじめとし、北大に移られてからは教育福祉学、貧困研究、本学に來られてからは専門職養成の学長という立場から、ケアについて検討しはじめているとのことだつた。

社会福祉学のことでいえば、青木先生の福祉への関心は、社会福祉学それ自体に対する批判からだつたのこと。社会福祉学科に身を置く者としては、自分の立ち位置を再確認させられる言葉であつた。確かに社会福祉学は複合的な学問であり、私自身どこか違和感を持つこともありながら受け入れようとしてきて、社会福祉学を学んできた。既存のものへの批判は、青木先生ご自身が学ばれた農業経済という他の専門領域からの視点と当時の社会福祉学の学問の若さであることが想像できる。しかし、その後を経験された、道内各地を巡りながらの社会福祉調査（フィールドワーク）から、強い影響を受けたとも話された。自分が学ぶだけでなく、現実を見ることは黒板を背にするよりはるかに影響力があり、もう「社会福祉から逃げられない」と感じられたとの話は、共感した。研究もそうであるが、社会福祉を悩みながら学ぶ学生にとつても、現場のソーシャルワーカーにとつても、誰もがその道に入る決心をする一瞬ではないだろうか。

また、青木先生が時おり口にされ講演のなかでも話された「社会福祉は妥協の学問」という言葉の意味も、私なりに理解できたような気がする。社会福祉は、財政的なこと、精神的なこと、対人援助における関係性など、ありとあらゆるところで折り合いをつけながら実践している。そのような曖昧さの良さを含み、現場主義で貫く社会福祉学への敬意だと理解した。先生の研究テーマは一見、移り変わっ



ているようにもとれるが、若いころの「人はなぜ平等でないのか」というご自身の問いが、研究のスタートであり、常に一貫して持ち続けていた関心ではないだろうか。

さらに、専門職養成という社会的な責任を持った大学での学長をされたご経験から、学生の学びの姿勢は、一定の知識水準を担保した国家試験対策など答えのあるゴールを目指す学びと、自ら課題や疑問を持った学びのふたつがあることを指摘され、知的好奇心への重要性などを訴えた。それは、社会福祉学が専門職養成の枠組みのなかに組み込まれた大学の教員への、注意喚起でもあるようだった。

ご講演で研究のことを話される青木先生は、実にいきいきとした表情のように感じ取れた。まだまだ新しい視点で研究テーマに取り組まれていくのだろうなと思うと、これからの先生の新たな発想はとても楽しみに思う。

私自身、分野は近いながらも青木先生との出会いは本学に赴任が決まってからである。大学生時代の学部のゼミで『現代日本の「見えない」貧困』を輪読したこと、自分の卒業論文や修士論文執筆のときに参考文献で引用させていただいた程度の「お付き合い」だった。赴任する直前に北大で貧困研究会が開催されたときにお会いしたのが初めてであった。そのとき挨拶をさせていただいた私に「あんまりいい大学じゃないけど」と言われた。赴任前の私は少々不安になった記憶があるが、今となっては笑話である。それでも、そこには青木先生の話を知りたいと名寄市大の学生も参加していて、学問に関心を持ってやってくる学生がいる大学だと期待をしたのを覚えている。しかしながら、私自身、本学に赴任してせつかく近くにいることができたのに、自分の研究が恥ずかしく、研究の議論には及ばなかった。それでも学長室のドアをノックすればよかったと、ただただ後悔している。

青木先生、どうぞこれからもますますお元気で。

社会福祉学科教員 吉中季子



当日のスライドより

